

各地よりのたより

中 支 だ よ り

筒井部隊 堀 井 正 三

おい、頼むぜ報告に行つて来るから。夜の最後の立哨は軽く銃をひつ擔ぐ。ヒュッ! と虚空に口笛を吹く。次郎來い、太郎來い。二匹の白い支那犬はいまは東亞の衛兵である。

役者のやうないゝ男、これが追分三五郎、虎造節がかつかつと石だたみを遠ざかつて行く。

やをら即興詩人殿が立ち上る。あくびをした左手がそのまま銃身を握る。今日もまた頭をぶつつけて終ふ。低い入口の煉瓦が毎朝最初の挨拶をする。

狭い暗いトチカから出る外の世界はすでにほのぼのと自み行く天地の廣さである。夜來の安全装置を戻すと、がちゃりと遊底を開く。生きのいい若鮎のやうに弾丸が跳る。

視界のとゞく限りの地平がすみすみまで起き上つて来る。

朝の斜光は遠く遙に細部洩らさぬ忠實な繪師である。冷え冷えとした大氣がどうやら王者のやうな氣力を蘇らせる。銃を杖にほつと肩をおとすと、夜は危惧の濃霧、闇は疑惑の谷間、それ自體が目の見えぬ敵。玉突屋がよろよろ痺れた脚を運び出す。もういゝのかマラリヤは。手押車の稜線を轆り行くのが手にとるやうに耳に近い。

煙草がこんなにも大きくなつた。高粱畑が五人の土民と二頭の水牛を呑む。かうして見渡す中支戦線は全く平和な樂土だな。一つの小さな方速度がピューンと頬を過ぎる。二人の身體が瞬間がばと匍ふ。二弾めは掩蓋の上で砂けむりを上げる。先刻から狙つてやあがつたのだな! 玉突屋はにやにやてれてしまつてゐる。

なるほど樂土だ。苦りきつて詩人殿は吐き出す。鼻先の露がきらきらと旭日を映す。

米 國 よ り

謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

其後御健勝の事と拜察致します。私事、御蔭様で至極元氣で居ります。色々事情で、年始め當地出發、二三の天文臺へ寄り乍ら米大陸横斷、來る二三月

頃、歸國する事と致しました。年末のフィラデルフィヤのAAS(米國天文學會)年會へは出席致します。

最近の Christian Science Monitor 紙に A. P. ロンドン十二月 6 日發として下の様な記事がありました。

「グリニチ天文臺は、最近の爆撃で、時計室、望遠鏡室の一部が爆弾及焼夷弾に依つて破壊された。その中には、1675年 Sir Christopher Wren の設計に依つて建てられたものが含まれてゐる。」

十二月 13 日

ハーバード天文臺 古畑正秋

編輯局より

この前の號には大變な失敗があつて申しわけが無い。改發氏の八行詩の組み方が誤まれたため、トンでも無いことになつて了つたので、今號に改めて組み直した。“詩”は單なる正誤文では濟まない。▲伊達氏のスライフ博士へ送る書面は、學術上非常に大切なトキメントであるから、單に個人から個人への私的なものに止めず、こゝに公開することにした。これで見ても分るやうに、本會の遊星面課の人々の努力は、決して無意義なものではないのであつて、伊達、木邊兩氏等の指導により、今後、世界的に大に雄飛してもらひたい。今年の秋には又々火星が近づいて來る。こんどは火星の緯度がウンと高いし、シーイングの良い時であるから、觀測部員たちは、今から充分な準備を以つて、奮闘してもらひたい。視直徑だつて、20" 以上になるのだから、決して一昨年に比べて見劣りのするものではないに違ひない。それにつけても、木星と土星との接近期が終らんとしてゐる今日、此等の遊星面の觀測結果が未だ何所からも報告されて來ないのはどうしたものか!? ▲本田氏の“黃道光の觀測手引”は少々時機を失したきらひがあるが、しかし、秋のシーズンにも役に立つので、こゝに出すこととした。▲こゝに“1942年”の略歴表を讀者に贈る。天文家たるものは、世人に一步先んじて、宇宙の歩みを認識する義務がある。▲本號には記事幅狭のため、たて組みの4號活字附録を取り止め、次號にまはすこととした。▲次號は、昨秋の水星の太陽面經過の記事の特輯號としたい心算である。少々おくれたけれど、近來、彗星の去來などで、非常に多忙を極めたし、又、一方に於いて、水星の觀測者からの諸報告や、寫眞等も、多少おくれた向きがあつたのだが、今は殆んど出揃つた。▲今年内には是非一回ぐらゐ、彗星の特輯號を出したいし、又、故スコフィールド氏の遺稿や業績を満載した特別號をも出したいと思ふ。